

ELTama Newsletter

発行：玉川大学英語教育研究会 〒194-8610 東京都町田市玉川学園6-1-1 tel.042-739-8816 fax.042-739-8847

玉川大学英語教育研究会（ELTama）の めざすもの

玉川学園理事・玉川大学大学院文学研究科長
高橋貞雄

玉川大学の英語教育は1947年に旧制大学の文農学部文学科で始まったと言えます。2年後の1949年には新制大学令により文学部英米文学科がスタートしました。さらに、1972年には大学院文学研究科に英文学専攻修士課程が開設されました。この間現在に至るまで、中高を中心に数多くの英語教員を輩出してきました。校長職や指導主事などの立場で、英語教育をリードしている方もいらっしゃいます。私事ですが、私自身は英文学専攻の第一期生です。私は大学の中に身をおいて英語教育に携わっておりますが、大学が多くの英語教育人材を全国各地に送り出しながら、それを束ねたり活かしたりする組織がないことを憂慮しておりました。大学院の英文学専攻は学生の研究志向が徐々に英語教育にシフトしてきたこともあり、2010年に英語教育専攻に改組しました。これを一つの契機として英語教育研究会を発足させ、その運営事務局を英語教育専攻におくことにしました。

会の名称は「玉川大学英語教育研究会」とし、通称をELTamaとすることにしました。ELTamaはEnglish Language TeachingとTamagawaを合成した呼び名です。この研究会は、玉川大学大学院・玉川大学出身者で英語教育に携わっている方、英語教師を志望する学生および大学院生、英語教員養成にかかわっている大学教員を基本母体としています。しかし、この会の内容に賛同していただけるのであれば、どなたでも参加することができます。私は、この研究会の三位一体の意義を以下のように考えています。

玉川の卒業生で英語教育に携わっている方は、玉川の同窓生であると同時に英語教育という共通の基盤を持っています。一方で教員歴はまちまちです。すでに指導的な立場にある方も教員になったばかりの方もいます。多様な指導のアイデアもあるでしょうし、悩みもあるでしょう。お互いに情報を交換しあったり助け合ったりすることができるのではないのでしょうか。また現在は学生ですが、これから教職に就くことを目指している方を助けていただけませんか。現場の先生方は学生たちにしてみれば良いモデルです。先生方が卒業生として先輩として相談に乗ってくれるのであれば、これほどありがたいことはありません。

学生の方々は、教職に就くという夢や希望はありますが、不安のほうが大きいでしょう。もちろん我々大学の教員から現場についていろいろな情報を得ることはできるでしょう。

しかし、現職の先生方から直接に指導を受けたり、相談にのってもらったりできればどれほど心強いかわかりません。この研究会に参加して下さる先生方のほとんどは玉川の卒業生です。喜んで支援して下さるはずですよ。

大学にいる我々教員にとってはどうでしょう。とりわけ最近卒業して英語の教員になられた方々は気になります。無事に職責を果たしているだろうと信じてはいるものの、困っていることはいないだろうか、悩んでいることはないだろうか、気になるものです。何かあればいつでも連絡してくださいとは言うものの、ひとたび卒業してしまうと社会と大学には敷居ができてしまうのではないのでしょうか。最近さまざまな形で教員研修が行われています。ELTamaも教員研修の一翼を担いたいと思っています。しかし、ELTamaは堅苦しくない本音で語れる研究会でありたいと思います。我々にとってもっともありがたいことは、現場の先生方の生の声を直接伺えることです。その声を今後の教員養成に活かしていきたいと思えます。時々現場の先生方から、英語教育はどうしたのか、教員養成はどうなっているのか、とお叱りにもた指摘を受けることがあります。玉川の英語教育と教員養成は長い伝統に支えられていると思っています。これからは、さすが玉川、と言われるほどに一層充実したプログラムを提供できるようにしていきたいと考えています。

ELTamaは、現在は、年に一度8月に「ELTama 英語教育セミナー」を開催しています。参加者の声を伺いながら、また教育政策の状況を見ながら、より実りのあるセミナーを作りたいと思っています。研究会の発足当初からNewsletterも発行したいと思っておりました。遅くなりましたが、このたびVol.1を発行できるということで嬉しく思います。これについても皆様からフィードバックをいただければよりよいものにしていくことができるでしょう。私案としては、「私の授業実践」、「一押しアクティビティ」、「アウトプットを引き出す工夫」、「楽しい文法指導」などといった授業に活かすことのできるアイデアをいただければありがたいと思えます。夢は持たなければ実現しない、と言います。次代を担う子供たちのために、そして授業力向上のために、お互いにいろいろな夢を持って少しずつ実現させていきましょう。

平成24年8月28日に中央教育審議会が「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」と題する答申を行いました。その中で、「学び続ける教員像の確立」やグローバル化への一層の対応の必要性が謳われており、教員免許も、一般免許状、基礎免許状、専門免許状の3種類にするという方向性が示されています。玉川大学としても、そうした方向に対応した教員養成を推し進めていきたいと思えます。ご支援をお願いします。

ELTama 英語教育セミナーの歩み

玉川大学文学部教授

日臺滋之

ELTama 英語教育セミナーも今年で4年目を終え、その間に現職の英語教師と大学院生、また学生間で交流の輪が少しずつではありますが、着実に広がってきているように感じています。

校務の合間をぬって、話題提供にご協力いただいた現職の英語教師、また会の運営にあたってご尽力いただいた運営委員の先生方、また会場準備のお手伝いをして下さった大学院の皆様にご礼申し上げます。

ここで、今までの第1回から第4回までのELTama 英語教育セミナーの歩みを当日のプログラムをもとに振り返ってみたいと思います。

第1回 ELTama 英語教育セミナー

2009年8月20日(木) 9:30～16:00

記念講演 「英語教育の課題」高橋貞雄(文学部長・文学研究科長、修英75)

話題提供1 「中学校の実践報告」
「中学校における語彙指導、授業活動の紹介」
日臺滋之(文学部准教授、英米81)

話題提供2 「高等学校の実践報告」
「公立高校における授業」長谷部輝幸(千葉県立東金高等学校教諭、外英93)

話題提供3 「授業に関して話したいこと、聞いてみたいことを参加した先生方と情報交換しましょう」
相原完爾(神奈川県立伊勢原高校教諭、英米82)

話題提供4 「大学の教員養成」小田眞幸(文学部教授、外英84)

玉川大学英語教育研究会第1回座談会

「英語教育のRESOURCESについて
海外の動向からの視点」小田眞幸

第2回 ELTama 英語教育セミナー

2010年8月19日(木) 9:30～16:00

議題： 玉川大学英語教育研究会(略称ELTama)会則承認

提案者： 事務局代表 井澤牧子(リベラルアーツ学部小学校英語事務局、修英10)

話題提供1 「中学校の実践報告」
中学校における授業実践 坪井佑夏(玉川学園中学年教諭、国言09)

話題提供2 「高等学校の実践報告」
公立高校における授業 磯貝文美子(都立東村山高等学校教諭、国言09)

基調講演 「英語授業力を鍛える」松沢伸二(新潟大学教育学部教授)

話題提供3 「今後の教員養成の在り方」小田眞幸(文学部教授)
運営委員： 長岡清通(玉川学園中学年教諭、修英82)、井澤牧子、相原完爾、丸尾千晶

第3回 ELTama 英語教育セミナー

2011年8月18日(木) 9:30～16:00

話題提供1 「中学校の実践報告」
「生徒のやる気を引き出す工夫」石川絵美(神奈川県平塚市立金目中学校教諭、修英04)

話題提供2 「高等学校の実践報告」
「学力差のある高等学校における英語教育」
遠藤しずか(静岡県立浜松東高等学校教諭、外英02)、林美智香(東京都立田柄高等学校教諭、外英99)、丸尾千晶(東京都立墨田川高等学校教諭、英米00)

基調講演 「英語教育における語彙指導の実践」相澤一美(東京電機大学教授)

話題提供3 「英語教育常識？」小田眞幸

事務局引継 事務局代表 長岡清通

運営委員： 長岡清通、丸尾千晶、石川絵美、田島利枝(神奈川県立港北高等学校教諭、修英10)

第4回 ELTama 英語教育セミナー

2012年8月17日(金) 9:30～16:00

話題提供1 「中学校の実践報告」仲圭一(東京都東大和市立第四中学校教諭、外英00)

話題提供2 「高等学校の実践報告」吉田玉青(神奈川県立相模原総合高等学校教諭、修英03)

基調講演のための情報交換会「テーマ:読む力を育てる授業」
テーマ設定の説明：

高橋貞雄(玉川学園理事・玉川大学大学院文学研究科長)

ファシリテーター：松本博文(文学部准教授、外英93)

基調講演 「英語で読む力とその育て方」池野修(愛媛大学教育学部教授)

話題提供3 「玉川大学の新しいEFLプログラムについて」
小田眞幸(文学部教授・玉川大学EFL運営委員会委員長)

事務局引継 事務局代表 長岡清通

運営委員： 長岡清通、仲圭一、吉田玉青、田島利枝

この夏のELTama 英語教育セミナーを終えて、玉川の大先輩で英語教師の後藤英照氏(元東京都立富士森高等学校校長)よりお手紙を頂戴しました。お手紙の一部を引用させていただきます。

「……現在このセミナーのような研究の場があることは、卒業生で現場にある教師にとっては、研究、心のあり方両面で強い支えになり、また在学生にとっては、どんな書物よりも生きた情報の源、となりうると確信します。……」

英語教師の皆様、大学院生、学部生の皆さん、ELTamaの輪が今後も広がり実を結ぶことを願っています。第5回のELTama 英語教育セミナーはまた8月に行われます。玉川の丘でお会いしましょう。

玉川大学英語教育研究会 ホームページ

www.tamagawa.jp/graduate/humanities/eltama/index.html

名詞化について

神奈川県立伊勢原高等学校
相原完爾

はじめに

名詞化 (Nominalization) は、主に動詞の語幹に接尾辞 -ion, -ment, -ance, -al 等を付加して名詞形にするものである。例えば、(1a) の動詞 destroy の語幹に接尾辞 -ion が付加して (1b) の派生名詞 destruction になる。その際、元の動詞が本来備えている文法的要素 (主語・目的語等) も引き継がれるのが通常である。高校の学習参考書で名詞化について扱っているのは、江川 (1991, pp.30-36) が「名詞構文」として言及しているぐらいであるが、名詞化は「語の文法 (形態論 (morphology))」と「文の文法 (統語論 (syntax))」との接点にあり、とても興味深い現象である。本論ではまず名詞化に関する 3 つの論文 Randall (1988), Grimshaw(1990), Alexiadou & Grimshaw (2008) を概観する。次に Smith (1972) が述べている動詞の起源がアングロサクソン語からラテン語かに着目し、名詞化を考察した場合、Grimshaw が提案している 3 つのタイプの派生名詞の特徴を示す診断基準は果たして正しいのかを現代英語をデータに考察し、最後にいくつかの課題を提示する。

- (1) a. The enemy destroyed the city. (Chomsky 1970, p.43)
b. The enemy's **destruction** of the city.
The **destruction** of the city by the enemy

1 Randall (1988)

Randall は、動詞に接尾辞 (suffix) が付加して品詞が変わっても、元の動詞が固有にもつ義務的要素、項 (argument) を保持することを、「継承 (inheritance)」と呼んでいる。例えば、動作主をつくる接尾辞 -er が動詞に付加する時、(2a,b) は最大で 1 つの項 (主に直接目的語) だけを継承し、(3) の斜体字に見られるそれ以外の項や、(4) に () で示された随意的要素、付加詞 (adjunct) を継承しないと述べている。

- 例文の先頭についている * は非文を示す。
(2) a. a flier of rockets
b. a healer of the sick (Randall 1988, p.132)
(3) a. *America is a putter of men *on the moon*.
b. *A zoologist is more than just a comparer of African elephants *with Indian elephants*.
c. *A surgical nurse is more than just a hander of scalpels *to surgeons*. (Randall 1988, p.134)
(4) a. He is a learner of poems (**by heart*). (Randall 1988, p.145)
b. She is a healer of sick children (**of their diseases*).
c. the flyer of the plane (**to Paris*) (Randall 1988, p.137)

(2) では動作主を示す -er 名詞は直接目的語だけを継承している。しかし (3) が非文なのは本来 put, compare, hand は動詞句内で義務的に 2 つの項を取る動詞だが、-er 名詞になっても直接目的語以外にもう 1 つの項 ((3a) *on the moon*,

(3b) *with Indian elephants*, (3c) *to surgeons*) も継承しているからである。また (4) が非文なのは項である直接目的語の後ろにさらに付加詞が続いているからである。

一方、過程 (process) の行為名詞 (action nouns) を造る接尾辞 -ing は、(5) で動詞句内のすべての項を、(6) で付加詞もすべてそのまま継承している。

- (5) a. the putting of men on the moon.
b. the comparing of African elephants with Indian elephants.
c. the handing of scalpels to surgeons. (Randall 1988, p.132)
(6) a. the learning of poems (by heart)
b. the removing of nuts (from sticky bolts)
c. the driving of semis(around corners) (Randall 1988, p.135)

注目すべきことは、同じ接尾辞 -ing でも結果名詞 (result nouns) をつくる -ing は付加詞だけではなく、直接目的語も継承しないことである (7a-c)。

- (7) a. The cooking (**of Indian food*) was starchy. 「料理」
b. The typing (**of the manuscript*) is on the desk. 「タイプしたもの」
c. Their finding (**of the fossils*) appeared in *Science*. 「発見したもの」 (Randall 1988, p.134)

また上記以外で行為名詞をつくる接尾辞 -ion, -ment, -al 等は、(8) の直接目的語を示す of 句は継承するが、付加詞の by 句は継承しないので、「過程」を示す -ing と「結果」を示す -ing の中間に位置するものと考えられる。この点については第 3 節でさらに検討する。

- (8) a. the direct ***-ion/-ing** of traffic ***by** policemen.
b. the replace ***-ment/-ing** of footlights ***by** nonunion electricians.
c. the apprais ***-al/-ing** of antiques ***by** experts. (Randall 1988, p.136)

Randall は (9) の「主題階層 (θ -Hierarchy)」および (10) の「主題受け継ぎ原則 (Thematic Inheritance Principle)」を提案した (Randall 1988, pp.138-9)。

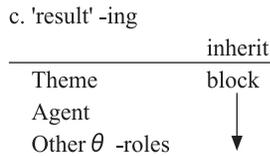
- (9) 主題階層 cf. Grimshaw (1990, p.24)
Theme (主題)
Agent (動作主)
Instrument (道具), Source (起点), Goal (目標),
Path (経路), Location (場所), …

(10) 主題受け継ぎ原則

「統語範疇 (すなわち品詞) を変え、ある意味役割 (θ -roles) の付与を阻止 (block) する操作は、主題階層上で (その意味役割よりも) 低いすべての意味役割を阻止する」

すなわち、(11a) の「過程」を示す -ing は Theme 以下すべての意味役割を継承 (inherit) する。(11b) の接尾辞 -er, -ment, -ion は、Theme は継承するが、Agent 以下すべての意味役割を阻止する。また (11c) の「結果」を示す -ing は Theme 以下すべての意味役割を阻止する、と説明している。

- (11)
a. 'process' -ing
Theme inherit
Agent ↓
Other θ -roles
b. -er, -ment, -ion ↑
Theme inherit
Agent block
Other θ -roles ↓



2 Grimshaw (1990)

派生名詞 *examination* は動詞 *examine* に接尾辞 *-ation* を付加して造られたものであるが、Grimshaw (1990) は、派生名詞は意味が多義的 (ambiguous) であるとし、(12a-c) の3つに分類している。

(12)a. John's **examination** of the patients took a long time.

(ジョンは患者を診察したが時間がかかった)

b. The **examination** lasted for hours. (その試験は何時間にもわたった)

c. John's **examination** was very long. (ジョンが作った(受けた、持っている) 試験問題はとても長かった)

Grimshaw は派生名詞を、「項構造 (argument structure) を持っている名詞 (complex event nominals (以後 CENs) (12a))」と、「項構造を持っていない名詞 (result nominals (以後 RNs) (12c))」の大きく2つに分けた。項構造とは本来、動詞が固有に備える義務的要素、項の数と、その項が示す意味役割を表すものであるが、Grimshaw はさらに「相 (aspect)」を示す出来事構造 (event structure) を考慮している。詳細については Grimshaw の第2章を参照してもらいたい。ところで (12a) の **examination** は CEN で、所有格の John's が「診察」という行為をし、目的語の *of the patients* に働きかけ、結果的に患者は診察を受けたことを示している。(12c) の *examination* は RN で、「試験」に関わる具体物としての「試験問題」を示している。そして Grimshaw はこの2つの名詞を区別する診断基準として (13) を挙げている (Grimshaw 1990, pp.49-59)。

診断基準	CENs	RNs(SENs)
① of句を取る (14a)	OK	*
② 頻度の形容詞 <i>frequent</i> , <i>constant</i> との共起 (14a)	OK	*/OK
③ 動作主指向の形容詞 <i>intentional</i> との共起 (14b)	OK	*
④ 「目的」を示す不定詞句との共起 (14c)	OK	*
⑤ 「相」を示す修飾語との共起 (14d)	OK	*
⑥ Be動詞で結ばれる (14e)	*	OK
⑦ 複数化 (14f)	*	OK
⑧ 不定決定詞との共起 (14g)	*	OK

下記 (14a-g) に CENs の例を挙げる。

(14)a. The *frequent* collection *of mushrooms*

b. The instructor's *intentional* examination of the student

c. The consumption of drugs *to go to sleep*

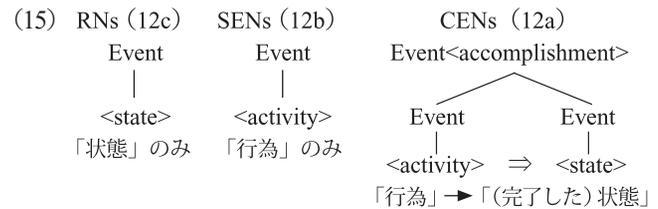
d. The destruction of Rome *in a day* (*for two days)

e. *That *was* the assignment of the problem

f. *John's *constant examinations* of the students

g.*An / *one / *that assignment of the problem

また Grimshaw は後者の「項構造をもっていない名詞」をさらに2つに分け、(12b) は出来事 (event) のみを表しているので *simple event nominals* (以下 SENs) と名付けている。しかし、*-ing* 以外の派生名詞が上記の RNs, SENs, CENs のうちのいずれの解釈を持つかは個人的にゆれがあり、判断することがむずかしい。まさに Grimshaw が指摘するように、派生名詞があいまいさ (ambiguity) を備えている所以である (伊藤・杉岡 2002:79)。Grimshaw は event という用語を用いて派生名詞を3つに分けているが、派生名詞と「時制」「相」等との関連性、および event 構造自体を詳細に明らかにしていない。しかし上記 (12a-c) を event 構造で示すと (15a-c) になると考えられる。(Grimshaw 1990, pp.26-7; Engelhardt 2000, p.76)



3 Alexiadou & Grimshaw (以後 A&G (2008))

Chomsky (1970) によれば、動詞 *grow* は他動詞にも自動詞にもなることができる *causative verbs* であるが、接尾辞 *-th* が付加して派生名詞 *growth* になると、(16a) のように目的語を示す *of* 句を取らない自動詞的派生名詞になり、(16b) のように *of* 句を取る他動詞的派生名詞にはならない、と述べている。

(16)a. The corn's *growth*. cf. The corn *grows*. (Chomsky 1970, pp.25-6)

b.*The farmer's *growth of the corn*. cf. The farmer *grows the corn*.

しかし Smith (1972, p.137) によれば、ラテン語を起源とする動詞 (例 *alter*, *rotate*, *terminate*, *submerge*, *escalate*, *conclude* 等) はラテン語を起源とする接尾辞 (例 *-ion*, *-ment*, *-al*) を取り、(17) のように自動詞的・他動詞的派生名詞の両方を造ることができる。

(17) Robert's *conversion*. / The priest's *conversion of Robert*.

一方、アングロサクソン語を起源とする動詞 (例 *end*, *fall*, *laugh*, *stop* 等) はラテン語を起源とする接尾辞を取らずにそのまま名詞になることができ (これを「転換 (conversion)」あるいは「ゼロ派生 (zero-derivation)」と呼び)、(18) のように目的語を取らずに自動詞的派生名詞しか造らない。

(18)a. the train's *unscheduled stop*.*the guards' *unscheduled stop of the train*

b. the race's *end*. / *the judge's *end of the race*

4 考察

ここでは、英語の本来語であるアングロサクソン語を起源とするゼロ派生名詞と、1066年にノルマン人がイギリスに侵入したこと (Norman Conquest) により、大量に使用されるようになったラテン語を起源とする借入語 (loan word) を比較して、次の①②③について調べてみたい。

① Grimshaw (1990) が述べている (13) の診断基準はすべて正しいのか。例えば、接尾辞 *-ion*, *-ment* が付加するラテン語起源の派生名詞は *of* 句を取ることも可能なので、項構造をもつ CENs と考えるならば複数形にはならないはずであるが、果たして複数形の例は見つからないのだろうか？

② Smith (1972, p.137), Alexiadou & Grimshaw (2008) が (16) で述べているように、アングロサクソン語を起源とするゼロ派生名詞が、目的語を *of* 句として取る他動詞用法は果たしてないのであろうか。

③ もし①②で述べたような反例が見つかるとするならば、どのように説明すればよいのであろうか。

なお調査対象として、アングロサクソン語起源のゼロ派生名詞については *turn* (<OE *tyrnan*, *turnian*), *climb* (<OE *climban*), *throw* (<OE *þrawan*), *end* (<OE *endan*), *ring* (<OE *hringan*), *drop* (<OE *dropian*) を、ラテン語起源の派生名詞については接尾辞 *-ion*, *-ment* が付加した *alteration* (<F *alterer*), *destruction* (<OF *destruire*), *distribution* (<L *distribut-*), *examination* (<L *examinare*), *achievement* (<F *achever*), *assignment* (<OF *assign*), *punishment* (<F *puniss-*) を、Corpus of Contemporary American English (COCA (1990-2011)) からデータとして収集した。なお上記の () 内は OED で、元の動詞がどこから来たか起源を示している。

ところで第3節でゼロ派生名詞はアングロサクソン語から由来するものと述べたが、中には OF から由来しているゼロ派生名詞 *increase*, *change*, *use* も存在する。

Smith (1972) が述べるように、*-ion*, *-ment* を接尾辞として取るラテン語起源の派生名詞は (19) で見るように、確かに *of* 句を取り CENs になっている例が多数見られた。

- (19) a. ...the National Cancer Institute in the United States that Maitake may help prevent HIV's **destruction** of the body's T-Cells. (1995 MAG *TotalHealth*)
 b. He participates in his church's **distribution** of food to needy families, ... (1994 MAG *Ebony*)
 c. Richard Kinder's **examination** of the energy sources of the U.S. present and future... (2009 NEWS *Houston*)
 d. Heizo Takenaka...has forced the nation's banks to accelerate their **disposal** of nonperforming loans... (Time Sept.22,2003, P.24)

一方、ゼロ派生名詞 *drop*, *end*, *open*, *sell*, *sit*, *stop*, *turn* 等は、(20) に見るように、*of* 句を取らずに自動詞的用法のものが多く見られた。

- (20) a. He believes Tiffany's recent sales **drop** is due to commodification... (2007 MAG *Fortune*)
 b. ..., you must learn the hour of the tide's **turn**. (2010 FIC *FantasySciFi*)
 c. ...our atmosphere will hold nearly 1,000 parts per million CO2 by century's **end**. (2011 MAG *ChristCentury*)

上記より、(19) のラテン語起源の派生名詞は *of* 句を取るため CENs であり、項構造 (argument structure) と出来事構造 (event structure) の両者をもっているが、(20) のアングロサクソン語起源とするゼロ派生名詞は *of* 句を取ら

ないので項構造 (argument structure) も出来事構造 (event structure) も保持しないと言うことができるかもしれない (A & G 2008:3,12)。

伊藤・杉岡 (2002, pp.75-6) によれば、SENs は出来事を指しているが、「モノ」として出来事をとらえているので、複数回の出来事があれば複数形になることができる。一方、CENs は動詞の項構造をそのまま継承し、出来事解釈を引き起こすので、複数形というモノ的な視点は関与せず、不可算名詞、すなわち単数形で表されると述べている。

しかし、①の反例として (21) に見るように、CENs であっても複数形になっている例が見られる。これは (13) の診断基準に反することになる。

- (21) a. They're going to begin their **distributions** of food supplies and other medical needs and blankets for people. (2006 SPOK *CNN-King*)
 b. ..., we examine their efficiency of *various assignments* of liability between landlord and tenant. (1995 ACAD *EmvirAffair*)
 c. Aldur's **alterations** of my mind and my personality had made me more adventurous than Beldaran anyway, (1999 FIC *Bk:PolgaraSorceress*)
 d. Research has shown that students *often* do not engage in behaviors that lead to **punishments** of peers who cheat. (2009 ACAD *SportBehavior*)

では (21) の反例をどのように説明すればよいのであろうか。Roodenburg (2006) は、CENs が複数形を取る例を (22a) に見るように、ロマンス言語であるフランス語は CENs であっても複数化になることができる、一方、(22b) のようなゲルマン言語である英語の CENs は通常、複数化できないが、(22c) のように頻度を示す形容詞 *frequent* が加わると複数化できる、と述べている。

- (22) a. *les frequentes* destructions des quartiers populaores 'the frequent destructions of popular quarters'
 b. *the destructions of the city by the soldiers (Alexiadou, Iordachioaia, Sorare 2010, p.1)
 b'. the destruction of the city by the soldiers
 c. the *frequent destructions* of the city of Carthage by the Romans

(22b) の複数形が非文なのは、特定の兵士たちがその町を破壊した行為が 1 回限りと考えられるからである。一方、(22c) は長い歴史の中でローマ人によるカルタゴへの破壊行為が頻繁に行われたので、複数形が認められると考えられる。(21) でも複数形が認められるが同様の考え方である。注目すべきことは (22a,c) の *frequent* と同じように、頻度等を示す形容詞 (21b) *various*, (21d) *often* が見られることである。

ところで次の (23a) には行為の終点 (end-point) がないので行為の未完了 (atelic) を示している、すなわち John は荷馬車を押し始めても終点に到着したかどうかは分からない。しかし (23b,c) は行為の終点を示す *to New York*, *to the Yasukuni Shrine* が生じていることにより行為の出来事が完了 (telic) したことを示し、その出来事がこれまでに複数回行われたことを表している。

- (23) a. the pushing (*s) of the cart by John (Mourelatos 1978)
 b. There were at least three **pushings** of the cart *to New York* by John. (Borer 2005)
 c. Prime Minister Junichiro Koizumi's **visits** *to the Yasukuni Shrine*. (Time, Nov.29.2004)

すなわち、完了 (telic) を示す出来事は行為の始点と終点があり、行為の範囲が定められて ([+bounded]) いるので可算名詞 (count nouns) で表すことができる。従ってその出来事が複数回生じれば複数化 (pluralization) することが可能であると考えられる (Alexiadou, A. Iordăchioaia, G. and Soare, E. (2010))。

また②の実例として (24) でゼロ派生名詞であっても目的語を示す of 句を取り、項構造をもつ例が見られる。(24a-d) は元の動詞が他動詞にも自動詞にもなれる causative Vs の例である。

- (24) a. I kept thinking about the driver's **turn** of the wheel, ... (2008 FIC *ContempFic*)
 b. Yet for some reason Larry's **end** of the business was reviving up. (2003 FIC Bk:Underkill)
 c. Bridgetown residents were treated to the sound of St. Michael's **ring** of eight bells every holy day. (2007 ACAD *ChurchHistory*)
 d. Last year, just before the 50th anniversary of Sir Edmund Hillary's **climb** of Mount Everest, ... (2004 NEWS *Denver*)

基本的に直接目的語は of 句で表すことが多いが、(25) は of 以外の前置詞で内項を示している。また (26) は同じ of 句でも主語を表している例である。

- (25) a. the soldier's **entry** into / *of the city
 b. the refugee's **flight** from / *of the city (Rappaport 1983, 伊藤・杉岡 2002, p.79)
 c. President George W. Bush's **approach** to nuclear -security issues (Time, Nov.3. 2003)
 d. ...retaining the LDP's **hold** on power in the parliamentary elections. (Time, Sept.22,2003)
 e. President Obama's **push** for a clean-energy economy (Time, Aug. 24, 2009)

- (26) the **spread** of the virus to SARS-free regions (Time, May 12, 2003)

最後にゼロ派生名詞と -ion 名詞が共起し、同じ of 句を取っている大変興味深い例を挙げておく。

- (27) Japan's **arrest and deportation** of 14 Chinese activists who days earlier had also sailed to the island known as Senkaku in Japan and Diaoyu in China. (Time, Sept. 3, 2012)

5 結論

第1節では個々の接尾辞により「項構造の継承」の度合いが異なること、すなわち「過程」を示す -ing が項の継承に関して一番透明 (transparent) があり、一方、「結果」を表す -ing は透明度がかなり低いこと、-ion, -ment, -er 等はその中間にあることを見た。

第2節では派生名詞は意味が多義的で、項構造を持つか持たないかで名詞構造に違いが生じることを見た。

第3節ではほぼ同じ意味をもつ causative Vs であっても、ラテン語起源の動詞の場合は同じラテン語系の接尾辞 (-ion, -ment 等) が付加し、他動詞用法の派生名詞 CENs になる。一方、アングロサクソン語起源の動詞の場合はゼロ派生名詞となり、目的語を取らずに自動詞用法になることを見た。しかし、Grimshaw (1990) の診断基準とは異なり、ラテン語系の CENs でも行為の完了を示すならば、複数化が可能であること、一方、アングロサクソン語起源のゼロ派生名詞でも目的語を取る他動詞用法がかなり多くあることを見た。

今後の課題を2点挙げたい。第1はゼロ派生名詞がなぜ目的語を示す of 句を取ることができるのか、第2は派生名詞と相 (aspect) との関連性はどうか、第3は、安井 (2012:275) によれば、「名詞化」のような文法的操作あるいは文体論的操作が加わった「文法的メタファー」の使用度が急激に増加したのは、科学技術が発展した17世紀末ごろの散文に見られる、と言及している。そこで17世紀末以降の派生名詞および項の継承について調べてみたい。

名詞化は単に文を名詞句に直す書き換え問題レベルではなく、「語の文法 (形態論)」と「文の文法 (統語論)」との接点にあり、文構造も複雑で抽象性の高いかなりの思考力を要求する構文なので、英文法の中でも非常に興味深い分野である。本論が少しでも英語教育に資するものと期待する。

本論を書き上げるにあたって、文学部比較文化学科松本博文准教授には、内容に関して数多くの有益な御助言や励ましのお言葉を頂戴した。あらためて心から感謝申し上げたい。

参考文献

- Alexiadou, A. Iordăchioaia, G. and Soare, E. (2010) "Plural Marking in Argument Supporting Nominalizations," *Layers of Aspect*, ed. by Patricia Cabredo-Hofherr & Brenda Laca, 1-22, CSLI Publications,
 Alexiadou, A. and Grimshaw, J. (2008) *Verbs, nouns and affixation*. SinSpec(1): Working Papers of the SFB 732, ed. by Schafer, F. 1-16.
 Chomsky, N. (1970) "Remarks on Nominalization," *Readings in English Transformational Grammar*, eds. by Roderick Jacobs and Peter Rosenbaum, 184-221. Waltham, MA: Ginn and Company.
 Engelhardt, M. (2000) "The Projection of Argument-taking Nominals," *Natural Language and Linguistic Theory* 18, 41-88
 Grimshaw, J. (1990) *Argument Structure*. MIT Press, Cambridge, MA.
 江川泰一郎 (1991) 『英文法解説』改訂3版, 金子書房, 東京.
 伊藤たかね・杉岡洋子 (2002) 『語の仕組みと語形成』(英語学モノグラフシリーズ16) 研究社, 東京.
 Randall, J. (1988) "Inheritance," Wilkins Wendy (eds.) *Syntax and Semantics* 21. 129-146, Academic Press, New York.
 Roodenburg, J. (2006) "The Role of Number within Nominal Arguments: the Case of French Pluralized Event Nominalizations." Rutgers University: *LSRL* 36.
 Smith, C. (1972) "On causative verbs and derived nominals in English," *Linguistic Inquiry* 3, 36-38
 安井 稔 (2012) 「学習英文法への期待」(大津由紀雄編『学習英文法を見直したい』268-277), 研究社

(82年 文学部英米文学科卒業)